■研究十二月往来〈222〉

〈附子〉の古型
―天正狂言本の誤写と祝本狂言集

田口和夫

祝本狂言集は伝来の由緒は不明ながら、法政大学能楽研究所蔵、永井猛氏によって近世の諸台本より前、天正狂言本に次ぐ古型を有する台本であると定位されたものである。この度、永井氏著『狂言変遷考』（三弥井書店）に影印・翻刻と解題が収められて一般の目に触れるようになった。

近世の、大蔵流虎明本・和泉流天理本以下の諸本は、〈附子〉については結末の演出の揺れを除いて、ほとんど同様の進行をしており、固定度が相当に高い狂言と言える。いまさらだが、両本によってその進行を確認しておく。

①主（天理本、虎明本は大名）が二人の冠者に留守を言い付け、附子があることを言い置いて出かける。②ふたりの冠者は附子を見、食べる。③言い訳に掛軸を破り、台天目を打ち割る。④帰ってきた主に二人は相撲の結果掛軸・台天目を損ない、附子を食べて死のうとしたがまだ死ねない、と謡いがかりで述べ、追い込まれる（虎明本は叱り留）。

祝本〈附子〉は基本的には近世諸本に近いのだが、その中での特異なあり方については、すでに永井氏が注目されている。それは③④である。①②の段階は小異（①で大名）はあるが、大筋は変わらない。③言い訳の種を作るところが次のようになっている。

大郎「此けんざんハこれノたから物で、なにと石の上へなげても、かなづちでうツてもわれぬ。いざ、これをうちわツておごろじやれ」。二郎「おうそれハ、それがしに打わらせておいて、たのふだ人ニいおふといふ事か」。「いや、中〳〵さやうでハない。しぜんこれがわれたらバそれがしがおわふ程ニ、わツておごろじや　れ」。「しかとおやるか」。「中〳〵」。「御せいもんあれ」。「弓矢八まんそれがしがおゝ」。「さらばうちわツて御めにかけう」。

そこで石ノ上へびツしりといふて打わる所で、

「けんざん」は「建盞」であって、「建盞天目」のことである。『古語大辞典』は「天目茶碗の上等品」とし、文明本節用集の「建盞　ケンザン　建盞天目」を引く。

従って、祝本では掛け軸を破る場面はなく、「建盞天目」を割るだけであり、割るのは二人協力するのではなく、太郎冠者に勧められて次郎冠者が割ることになっている。これは永井氏が『沙石集』や昔話に近いとされたところである。なお、④のキリは「〳〵皆になるまでくうたれど、しなれぬ事ぞめでたけれ。〳〵。〳〵そちとこちと五百八十年、〳〵七まわり、〳〵さらば〳〵」となっており、大名はさきに引っ込み、冠者二人がめでたく終わることになっている。この祝言の留めについては天正狂言本がシャギリ留めであることと併せて金井清光氏が注目されるところである。

天正狂言本〈ぶすさたう〉は登場人物が僧と二人の者（おそらく新発意）である。これは原拠となった『沙石集』説話や「飴は毒」昔話に共通な要素であり、古型とみられていた所である。①②の進行はほぼ同じである。③の部分は次のごとくである。

さてゑさん天目打かふす。

この「ゑさん」は朝日古典全書の翻刻において、表章氏が「絵賛」と振漢字をされ、「絵画に賛詞を書添へたもの。床間にあった掛け

物であらう。」と注されて以来、異論の無かったところである。掛け軸と天目という二つは近世諸本において共通の要素であり、それと一致することも、この解釈が支持される原因であった。

しかし、祝本の「建盞」のみを打ち割る演出が説話や昔話における一種類のものを壊す形式と一致することから考えると、これが単なる流動としていいのか、という疑問が浮上してくる。

そういう眼で天正狂言本の表現を見ると、いままで気にならなかったことが問題となる。まず、「絵賛」と「天目」を「打ち毀す」となっていることである。「絵賛」は「引き裂き」あるいは「破り」、「天目」は「打ち毀す」とするのが普通ではないか。これらを「打ち毀す」で代表させる天正狂言本の略式表記法なのだと思えば一応の納得はできるものの、表現であるには違いないのである。

次に「絵賛」だけで「賛」のある「絵」と考えてよいのか、という問題がある。旧版日本国語大辞典は「絵賛」を絵画と定義しているが、用例中に挙げる日葡辞書は「絵に、通常その絵を誉めて、あるいはその絵に語りかける形で、書くのが慣わしとなっている警句の様な言葉」とする。要するに「賛」なのである。

ここで「ゑさん天目」は「けんさん天目」の誤写で、本来は「建盞天目」であったのではないかと想定してみよう。

天正狂言本が写本であって、誤写を胡粉で消して正しい表記に訂正してある箇所を有することは、知られているのだが、あまり注目されていない。その中で例えば、〈鴈かりがね〉で「きゝ」を胡粉で消して「とて」と訂正した所がある。これは「止天」の連綿体を「きゝ」と誤読し、その誤りに気づいて訂正したものと言えよう。

天正狂言本〈京金〉では名前を付け損なった僧が責められて「宝を使ふ」、そして「いつるひまでとりて帰るが、さりながら、名をきやう今とつて帰る。房ず、きやう今はさむひ物とて、ふるへて引こむ」という幕切れとなる。この「いつるひ」は表氏によって「出」「日」の振漢字が施され、そのままの解釈で通用していた。しかし、これも「きやう今はさむひ物」という僧のセリフと「震へて」という所作を考えれば、抽象的な「出る日」ではなく、「いるひ」＝「衣類」の誤写で、着ている僧衣まで剥がれたとするのが良いと考えられる。この場合は「留」の草体を二つに分解して「つる」と読んでしまい、その誤りが訂正されなかった所と言えるのである。「い」と「ひ」の交代は天正狂言本では普通の現象で問題ない。なお同曲にある難語「ゑたひ」は「得度」という漢字を読み誤ったものとされていたが、内山弘氏『天正狂言本本文・総索引・研究』（笠間索引叢刊114）では「ほつたひ」＝「法体」の誤写とされる。納得の行く見解だが、そうするとこれも「ほつ」の二字を「ゑ」一字に読み誤った例となる。

「ゑさん」の「ゑ」は天正狂言本においては「ゑたひ」の「ゑ」同様明らかに「ゑ」の字体である。天正狂言本に草体の仮名の誤読があるとして、「ゑ」になりうる「けん」の母漢字は「个」と「无」であろう。その連綿体が一字と誤認されたと考えるのである。

「建盞天目」を「打壊す」だけなら、これは祝本の演出と共通のものとなり、天正狂言本を読んだときの違和感も解消される。また祝本が古型を有することの一証を付加したことにもなる。蛇足ながら、近世の〈附子〉において掛け軸を破ることが追加されたのは、冠者二人の性格が描き分けられるようになったためと考えられる。それによって劇としての奥行きが増したことは明らかなのである。

この問題は以前、大妻女子大の伊藤真紀さんの卒業論文を指導した時に、祝本を用いるよう助言し、読み進めているうちに気づいたものである。

（文教大学教授）